

めずらこども園「優秀園 審査委員特別賞 実践発表会」開催レポート

2025年6月7日(土)、ソニー幼児教育支援プログラム「優秀園 審査委員特別賞 実践発表会」をめずらこども園で開催しました。会場(園)には、講師の安井正人先生、河合優子先生をはじめ、全国の認定こども園・幼稚園・保育所・大学等の教育・保育関係者、教育委員会や市内の小学校校長・教頭等約60名、午後からのオンライン配信には、約80名(端末数)の参加がありました。

以下にめずらこども園による開催レポートを掲載します。

発表会概要

1. 日時：2025年6月7日(土) 9:30~16:00
2. 主催：社会福祉法人芽豆羅の里 幼保連携型認定こども園 めずらこども園
3. 共催：公益財団法人 ソニー教育財団
4. 主題：「科学する心を育てる」「おもしろい！」からはじまる探求活動
5. スケジュール
 - 1) 公開保育 9:30~11:00
 - 2) 年齢別グループセッション 11:00~12:05
 - 3) 開会(オンライン開始) 12:50~13:00
 - 4) 研究発表 13:00~13:20
 - 5) 保育の振り返り 13:20~13:30
 - 6) 河合優子先生と保育教諭の対話 13:30~14:00
 - 7) 指導講評 14:00~14:30
演題「実践からみんなで学ぼう」 講師 聖徳大学 教授 河合優子先生
 - 8) 記念講演 14:40~15:10
演題「面白いからはじまる科学の芽」 講師 慶応義塾大学 教授 安井正人先生
 - 9) 安井正人先生と園長対談 15:10~15:55
ファシリテーター 河合優子先生
 - 10) 閉会式 15:55~16:00

公開保育

室内・園庭・forest(ニワトリやヤギのいる草原)において、子どもたちがそれぞれに好きな遊びをおもしろがり、夢中になって遊んでいる姿。また、年齢によっては友だちと遊びを共有し発展していく姿を見学していただきました。





年齢別グループセッション

0、1歳児は合同で、2～5歳児は年齢別で、参加者によるグループセッションを行いました。「おもしろがる子どもの姿、好きなことに没頭する子どもの姿や、興味・疑問を広げておもしろさを感じている子どもの姿」をどのように捉えたか。また、「面白がる・没頭することを可能にする環境構成や見守る保育者の姿」について、それぞれのグループで意見交換をしました。



開会（オンライン開始）

- ・めずらこども園宗像園長より挨拶
- ・ソニー教育財団根本章二会長より挨拶



研究発表

2024年度論文研究主題：「おもしろい！」からはじまる探求活動元1歳児の担任より、本園の考える「科学する心」について発表。1歳児の実践や、論文応募後の子どもたちの「おもしろがる姿」「不思議を感じている姿」など、本園の研究への取り組みなどを発表しました。



保育の振り返り/河合優子先生と保育教諭の対話

各年齢の活動内容や子どもの姿を担当より発表しました。その後、河合先生より、登壇の保育教諭二名に質問をしながら保育の振り返りと、日常の子どもたちの姿や保育者の関わり方についてお話しをいただきました。

河合先生より、0・1・2 歳児、3・4・5 歳児保育の環境は区切られているが、全体としては、全ての子どもたちをみんなで見てつながっている園である。「子どもは興味のあるものにさわり、体験することで大好きになっていく。それは、子ども主体の保育だからこそである」「子どもは夢中で遊びきると、自分で遊びに区切りをつけられる。満足することで次へ行くことができる」など、たくさんの事例から、お話をいただきました。

【会場から河合先生への質問】「ヤギの飼育や広い園庭など、めずらこども園では可能なことが、都市部では難しい。本日見た実践を、どのように生かしていけばよいか？」

(河合先生の回答)

「おもしろい」「すごい」と思ったことをどのように自園に持って帰るかが大事。例えば、プランターや米袋でキャベツを育てることで、虫を呼ぶことができる。枯草を溜めるだけでも虫が来る。1 つでも「おもしろい」ということを始めてみる。自園でできることから始めてみてはどうでしょうか。



指導講評 (河合優子先生/聖徳大学 教育学部教授)

「幼児教育の環境は、もの、ひと、自然だけではなく、時間や空間を含めて環境と捉える。たっぷり遊び込む時間の保障が十分にあり、めずらこども園すべての年齢でそれができていることが、先ほどのグループセッションの発表でも分かったと思う。『実践からみんなで学ぶ』ということの大切さを今回の発表会で感じることができた」と、当日撮影した子どもたちの活動・遊びの写真をプレゼン資料に交えながら、講評をいただきました。また、幼児教育と小学校教育との接続や、「はじめの 100 か月の育ちビジョン」についても、図表を用いてお話いただきました。

午前中の保育をご覧になられたに加え、次のように、「安心と挑戦の循環」と言われているが、安心して生活できるからやってみたくなる。上手くいかなくても先生がそばにいてくれる。つまり先生が「安全基地」になっている。怖いことがあっても先生に抱っこされてエネルギーをチャージしてまた遊びに行く。こういうことは、0 歳児であっても小学校 1 年生であっても同じ。「安心したい」「満たされたい」「関わってみたい」「遊びたい」「認められたい」そのあり方は、どの年齢でも大事である。乳幼児期にふさわしい生活とは、「保育者との信頼関係に支えられた生活」「興味や関心に基づいた直接的な体験が得られる生活」「友だちと十分に関わって展開する生活」と言われている。子どもが体験して生活を積み重ねていくことで、子どもの「世界」は広がり、また、子ども同士が相互に作用するところに幼児教育のよさがあり、そこに関わる大人の世界も広がっていく。一緒に面白い、一緒に考えることこそが大切、など、貴重なお話をいただきました。



記念講演（安井正人先生/慶応義塾大学 医学部教授）

安井先生が40年前の学生時代に行っていたボランティア（手足の不自由な子どもたちとの関わり）で、「手は出すな。目は離すな」と言われて苦労した、という話を例に挙げ、「めずらこども園の保育者はまさに、「手は出すな。目は離すな」を実践していたため、子どもが落ち着き安心して、いろいろな遊びに没頭する環境が作られていたとお話いただきました。また、『科学する心』とは？」「なぜ乳幼児期が「科学する心」を育むうえで大切なのか？」「科学する心」と倫理」などについてもお話がありました。



【『科学する心』とは？】

めずらこども園の考える「科学する心」の基礎1に基づいて、0歳児から5歳児が毎日行っていることと大人の研究者が行っていることは同じであること。好奇心からくる「おもしろい」「すごい」「不思議」「なぜ」が興味・関心につながり、それらがどんどん膨らんで学んでいくサイクルができる。自分も含め周りの研究者に共通していることは、「好奇心」と「熱意」を持っているということだが、そのきっかけが「おもしろい」ということが大事。好きなことであれば、時間を忘れてできる。没頭できる。集中力というのが「科学する心」を育てていくうえで最も重要であり、好きなことで熱意があればそれが集中力につながり、それを持つと粘り強くなる。どうでもいいことであれば「まあいいや」で片づけてしまうことも、自分が本当に好きなこと、興味・関心のあることは、人が諦め辞めてしまうことでも続けて粘ることができる。本日の話の中で、トライアンドエラー、失敗から学ぶという話があったが、失敗というのは成功を続けていけば“ない”に等しい。諦めないで続けられる、その集中力・持続力がどこからくるかというと、「好奇心」と「熱意」からであり、理由はない。

水の研究をしている理由は何かと聞かれても、本当の理由は答えきれない。なぜか分からないが、好きで、おもしろいと熱意を持って取り組んでいる。おもしろいということは遊び心である。他人が見たらどうでもいいことに一生懸命になれることは、子どもはもちろんのこと、大人になっても人生を生きていくうえで重要なことだと思う。遊び心や冒険心が出てくる源は安心感であり、安心すると子どもは冒険できる。安心感とは、自分が愛されている、自分の居場所があるということが一番の根っこにあって生まれる。私の臨床の師匠である仁志田 博司先生がNHKの番組で「1歳（歩かない、話さない）になるまでに、自分のことを絶対的に愛してくれる人が周りにいるということを確認できたら、子育てはほぼ成功」という話をされた。つまり親・母親の存在は大きいということが分かる。それを確認できた子どもは、安心して遊べる、冒険ができるのだと思う。冒険心を持つと殻（or 常識）をやぶることができる。信じていたことが実は間違っていたこともたくさんある。殻（or 常識）をやぶる力の根底にあるものは、冒険心、疑う心、当たり前前を当たり前と思わないことで、「科学する心」の根っこにあるものの一つであると考えている。

【なぜ乳幼児期が「科学する心」を育むうえで大切なのか？】

人間は視覚の動物で、主な情報は目からのインプットが圧倒的に多い。そして、乳幼児期に重要なことは、五感をフル活用することである。特に手を使うこと、例えば二ワトリを抱いたり、卵を触ったりすることは重要で、触らせてもらった二ワトリの卵が本当に温かかったということも、実際に自分で経験してみないと分からない。乳幼児期に五感をフル活用して感覚を磨き、観察力を養っていくことが大切と感じる。洞察力とは、今何が起きているのだろうということを読み取る力で、乳幼児期に育てるのは難しいと思うが、将来につながる可能性もある。観察力と洞察力が重なり合うことで生まれる「新たな発見（science）」「表面的に見えるものではなく、裏にある本質を見抜く力」は、乳幼児期教育を土台として小学校や中学校、高校で磨いていけば良いのではないかと。また、「予測する。工夫する」ことも乳幼児期から育まれるととても良いだろう。

【「科学する心」と倫理】

科学の進歩に伴ってより重要になってくるのが、「倫理」だと考える。「これはして良い」「しない方が良い」という判断を迫られる場面が多くなっていくからだ。「倫理」とは、倫（仲間）うちの理（ことわり：約束事）という意味で、時代や場所が異なれば、正解も異なる可能性がある。今この場でベストな選択を、意見や立場の異なる者同士で話し合い引き出すことと、そのプロセスが大切。例えば、1歳位の子ども同士が興味を示し、おもちゃの取り合いなどが起こった場合に、子ども同士でその状況を感じ取り、何らかの形でコミュニケーションをとる中で、職員が入り、時に応じてみんなにとってベストな解決法を引き出していくという作業を繰り返すことが望まれる。そもそも、ヒトは生まれた瞬間から誰かの助けがなければ生きていけない生き物。一人一人がお互いを思いやり助け合うことで、健やかに生きることができると同時に倫理観を養うことができ、しいては「科学する心」を育むことに繋がると思う。

安井正人先生と園長対談

【安井先生から宗像園長へ質問】

(安)「手は出すな、目は離すな」の難しさを職員が徹底していることに感心しました。ここに至るまでどのような過程を経てきたのでしょうか。

(園)「大人が我（個性）を出さないということです。職員が子どもたちに一生伴走していただけるわけではありません。子どもたちが自分たちの回路で考えていけるように、職員は見守ることを大切にしています。早く勉強ができるようになることがいいわけではありません。子どもが失敗した時に回路を回し、次はこうしようと思うことを繰り返す子どもたちを見守るようにしています。」

(安) 乳児検診に行ったときに、他の子と比べて、自分の子はどうかと気にされるお母さんが多くなっています。しかし、他と比べるのではなくその子の過去に比べてどうかということをしっかり見ていくことが大事で、成長というのは停滞したり何かをきっかけにぐっと伸びたりします。このぐっと伸びる手助けをできると良いのではないかと思います。どういう時にぐっと伸びるかということ、自信を持った時です。子どもが自信を持った瞬間に何らかの形で伸びる。いろいろな環境でたくさん伸びることができると良いと思います。

【宗像園長から安井先生へ質問】

(園) 安井先生の幼少期、ご両親はどのような声掛けをされておりましたか。

(安) 親は私を完全にほっておいていましたし、目も離していたのではないのでしょうか。両親にも感謝していますが、ラッキーだったのは、要所要所で信頼できる先生と出会えたことです。一番大きかったことは師匠との出会いで、信頼できる師匠の元で主体的に勉強できたことが、科学者としても医者としても重要だったと思っています。その出会いは、幼児期かもしれないし、小学生の頃かもしれないし、私のように大人になってからかもしれない、人それぞれだと思います。

(園) 安井先生が小さい頃は、どんなお子さんでしたか。

(安) 小学校の低学年までは野球ばかりしていました。今は、ゲームばかりする子どもが多くなっていますが、めずらこども園の子どもたちのように五感をフル活用して、自然と触れ合い過ごしていく経験が今はより大事だと思っています。

(園) 物事をよくわからないから、勉強していないからではなく、子どもたちが遊んでいる時に良いお顔を向け、共感と同意を送ってあげることが大切だと思います。大人もそうですね。「頑張っているね」「ありがとう」と共感と同意をもらうことで「よし、頑張ろう！」といい仕事ができますね。何かに一生懸命になれるということがとても子どもたちにとって大事だと思っています。



参加者のご感想

【保育の振り返り/河合優子先生と保育教諭の対談】

- ・子どもたちが自由に遊び込める環境、時間の補償をしてあげることが大切ということを変更して学ぶことが出来ました。保育士は、子どもに教えるのではなく、子どもに教えてもらうポジションにいることが大切だと学ぶことが出来て良かったです。
- ・ペットボトルに砂や水を入れることから葉っぱを入れることにつながったが、砂や水と異なり簡単に取り出せないといった子どもたちの好奇心や、それに対して導き出す行動を詳しく観察されていて、何気ない行動と感じてしまう物事にも注視して観察する姿勢を参考にしようと思えました。

【指導講評（河合優子先生）】

- ・河合先生には、オンラインからの参加者にもわかりやすいよう保育の様子を解説をいただきながら、また、全学年の担任の先生方に保育の様子を話していただき、保育の光景を思い浮かべながら聞くことができました。“幼児教育施設の横のつながりがますます大事になってくる” “架け橋期について地域全体で考えるフェーズにきている” “子どもの世界の広がりはその子の凸凹を含みながら広がっている”という言葉が印象に残りました。
- ・河合先生の「子どもは夢中で遊び切ったら自分で遊びの区切りをつけられるんですね」という言葉が考え深く、日頃子どもたちが夢中で遊んでいる場面で、中断させるような声掛けをしてしまっているなど反省しました。

【記念講演（安井正人先生）】

- ・「手は出すな、でも目は離すな」保育者としての関わり方の大切な基礎になると思いました。好奇心と熱意があればそこから、集中力と粘りが育ち、諦めない心が育まれると学びました。興味のあることに没頭できる環境を作りたいと思いました。倫理と道徳についてもわかりやすく説明していただき、ずっと入ってきました。
- ・安井先生の講話の中で人は好奇心と熱意があると集中力と粘り強さができると聞き、自分の好奇心とは何かを改めて考えました。日々の保育は色んな先生方や子ども、保護者、地域の方々等が連携して行われています。もしもの時に皆で協力して作業できるように日々の連携を見直して行きたい。
- ・安井先生の「手は出すな、目を離すな」という言葉が印象的でした。今の教育に求められている姿勢だと感じます。子どもたちの「面白い！」という気持ちをどう見守るか、時間や空間を制限していたことを反省しました。可能性に満ちた学びの芽を大切に育てていきたいです。

【安井正人先生と園長対談】

- ・対談では子どもがぐんと伸びるきっかけは、子どもが自信を持った時。それは環境が関わっている。人との出会い、タイミングがある。という話が印象的でした。
- ・乳幼児期に五感をフル活用して、自然や人と関わる経験を大切にしていきたいと、改めて思いました。
- ・「地球運命共同体」のリーダー予備軍を育てていきます。「道徳」と「倫理」のお話も興味深かったです。
- ・園長先生の「子どもたちの選んだことに同意と共感を向ける」「やりたいことを遮断しない」という言葉に学び、向き合って真摯に取り組んでいきたいと思いました。